

脱構築の方法論を一般的に提起することにジャック・デリダは常に批判的であるとはいえず、その脱構築的戦略についてある程度の見通しを持つことは可能であるだろう。本発表では『エクリチュールと差異』（1967）における論考「暴力と形而上学」からデリダの戦略の一端を明らかにしたい。というのも、「ギリシヤ的ロゴスの解体」という共通の問題意識をデリダとレヴィナスは持つが、「暴力と形而上学」においてはその同じ問題意識のもとにレヴィナスが批判されており、この批判はレヴィナス思想の理解や批判にとどまらず、デリダ自身の戦略についても明らかにすることが多くあるからである。また、本発表では特にレヴィナスをヘーゲルを介して批判する部分に注目したい。デリダ、レヴィナスに共通して問題として挙げられている哲学的言説の全体性、形而上学の閉域、すなわち自らの他者を常に自らの全体性のなかに包み込む運動が、特にヘーゲルの弁証法、円環をなす思考において範例的に見てとれるのである。

まず、形而上学の閉域の問題に触れる。「暴力と形而上学」の冒頭で哲学の死と生き延びの構造が記述されるが、それによれば、哲学は自らが死にうるという可能性のおかげで、逆説的にもその死の彼方に思考の未来があるというかたちにおいて生き延びてきた、というのである。自らの有限性の自覚とその乗り越えであるが、このような構造において有限な哲学はその内部で自らの有限性の彼方を問うことができないのであり、この哲学に属さない問いそれ自体を問うこと、「問いの可能性についての問い」だけが残されており、この不可能な問いを保持することへの厳命のもとに哲学は生き延びるのである。ここで、不可能でありつつも、自らの汲みつくしえない源泉として起源的でもある問いと、自らの内にある特定の哲学的問いの間での「闘い」が始まるとされる。しかし、このように診断された哲学の構造をそのまま受け入れることがデリダの目論むところであるのだろうか。まさにこの構造をヘーゲルは『大論理学』「学は何によって始められなければならないか」において自覚的に自らの学の中に取り込んでいるのではないか。哲学の外部を問うことは必ずしも閉域から外へ出ることはないのである。

次に、レヴィナスの全体性と無限の対置をヘーゲルに依拠して批判する「暴力と形而上学」第三節を検討する。ヘーゲル哲学における無限はレヴィナスの指摘するような全体性ではないのであり、むしろレヴィナスの無限をめぐる議論はヘーゲルの思想の中に登録されるものだと論じられているが、本発表ではこのようなレヴィナスへの批判が妥当であるのかという問題を取り扱うことはせず、ヘーゲルに依拠して語られる有限—無限とデリダの脱構築の戦略との関係を見ていく。